

災害ボランティア

救急救命，復旧，復興，地域防災など災害に関連する事態において，労働対価を求めず，人々の幸福を志向して，諸活動にかかわる個人やその活動。災害ボランティアは，災害のどの段階でも減災につながる活動を展開するが，通常は，災害発生後，被災地外部から被災地を訪れて活動し，比較的短期間に活動を終えて撤退する人々を指すことが多い。1995年の阪神・淡路大震災の救援活動に100万人を超える人々が参加したことから，注目を浴びた。歴史的には，関東大震災(1923)や伊勢湾台風(1959)，雲仙普賢岳噴火災害(1991)などにみられた市民相互の支援活動がある。また，全米災害救援ボランティア機構など災害ボランティア活動が定着している社会の動向も知られつつある。ここでは，「ボランティア元年」とまで称された阪神・淡路大震災を起点に，我が国の災害ボランティアの現状と経緯に焦点を絞って概説する。

●**災害ボランティア活動の現状** 発災直後の混乱期から災害復旧の時期には，炊き出し，避難所運営，仮設住宅訪問(図1)などさまざまな活動を展開する。活動の相互調整が必要となる。現状では，災害NPO(災害関連活動を行う非営利組織)と，行政や社会福祉協議会などが連携しながら，現地に災害ボランティアセンターを開設して，災害ボランティアの受付や活動の調整にあたることが多い。災害現場には，余震や衛生状態などの危険が残り，心理的負担も大きい場合があるので，災害ボランティアの安全や健康問題にも配慮し，二次災害を防ぐことの重要性が認識されている。

復興段階における災害ボランティア活動は，多岐にわたる創造的なまちづくり活動の一環という様相を帯びる。例えば，新潟県中越地震(2004)の被災地では，

山間に点在する集落で生活全般にわたって災害ボランティアが活動している。

平常時の地域防災活動では，災害NPOによる新しい地域防災プログラムに加わることがある。例えば，防災を意識せず楽しみながら参加できる防災行事，高齢者世帯での家具転倒防止器具の設置，障がい者などいわゆる災害時要援



図1 仮設住宅を訪問する災害ボランティア(新潟県長岡市) 護者を交えた防災訓練などが行わ

れている。

●**災害ボランティアの10年** 阪神・淡路大震災から10年以上が経過し、災害救援活動にボランティアが参加することは、もはや「当たり前」のこととなった。阪神・淡路大震災当時では、災害ボランティア活動に初めて参加する人々も多く、活動の相互調整、行政など他機関との調整が課題となった。災害ボランティアの定着に拍車をかけたのは、1997年に発生した日本海重油流出事故だと思われる。海岸に漂着した重油を掬い上げるという過酷ではあるが比較的単純な作業は、誰にでも参加できるボランティア活動として多くの人の目に映ったようである。この頃、阪神・淡路大震災や各地の水害などでの救援活動の経験をもとに、災害NPOが各地に発足し、救援活動に参加する災害ボランティアの支援のみならず、災害ボランティアを含んだ平常時の地域防災活動も展開していった。その後、災害NPOの全国規模のネットワークも結成された。阪神・淡路大震災から10年の間に、災害ボランティアは社会に定着したといえよう。ただし、災害ボランティア活動が過度に制度化（マニュアル化など）されることへの危険は視野に入れておくべきだろう。災害ボランティア活動は、あくまで、被災者一人ひとりの幸福を志向し、被災者に寄り添うところに原点があるということ、そして、状況に応じて臨機応変に変貌することを忘れてはなるまい。

●**災害ボランティアのグループ・ダイナミクス** グループ・ダイナミクスは、人々とその環境の動きを吟味し、現場の人々とともに活動をデザインしていく人間科学である。災害ボランティアに関するグループ・ダイナミクス研究も阪神・淡路大震災を契機に始まった。発災直後には、臨機応変な対応が求められることから、集合的な即興が生じることが示されている^[1]。また、被災者自身、何を災害ボランティアに依頼してよいのか判然としないことも多いし、そもそも、突然の外来者である災害ボランティアに要望を開陳することへの抵抗があるのは自然であるから、いきなり専門的な技術を使うことよりも、被災者の「ただ傍にいる」ことから始めることの重要性が指摘されている。これらの知見は、災害ボランティアセンターの運営やニーズの聴き取り活動などのデザインに活かされつつある。一方、防災活動では、災害に関心の低い人々の参加を推進することが求められているため、人々の日常生活に埋め込まれた、防災を強調しない防災活動がデザインされ、実施されている。さらに、災害ボランティアが有用性のみで支配されない生き方を暗示することが指摘され、現代社会の動向との関連が分析されている。ただ、この分野の研究とその応用の質的、量的な拡充はこれからの課題である。

[渥美公秀]

□参考文献

- [1] 渥美公秀『ボランティアの知一実践としてのボランティア研究』大阪大学出版会、2001